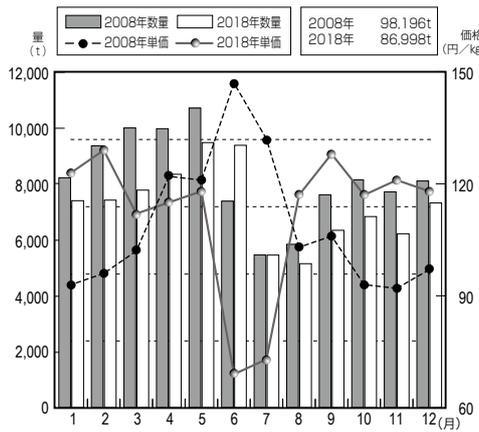


輸入の増減に 気をつけたい野菜類

2018年の生鮮野菜の輸入量が、近年では最も多く95万tを超えたが、冷凍野菜や調理野菜などを含む野菜類全体の輸入は過去最多の292万tとなった。なかでも冷凍野菜については同様に過去最多の108万tである。基本的には、輸入野菜類は日本国内での業務加工仕向けのもだ。品目によって

は輸入品を国内生産で代替しているという動きもあるが、17年の国産野菜不作が輸入を誘導し、作柄が不安定性推移となった18年には、冷凍野菜や生鮮野菜においても過去最多といった流れを生んだ。輸入品目のなかに、なぜそんな推移を見せているのか、と不審に思える品目が少なくない。

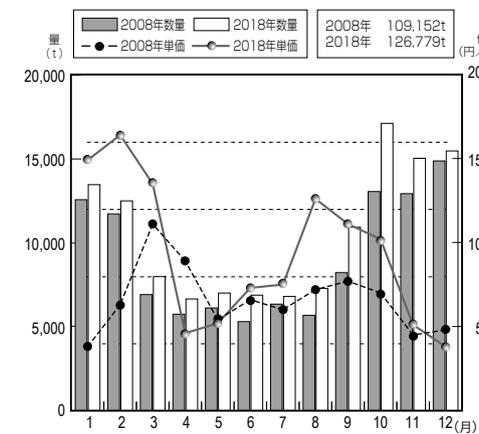
【背景】
特徴的なのは、東京市場では男爵薯需要が圧倒的で、ニシユタカには代替できないという事実である。代替できるとすれば輸入対応だが、生鮮ジャガイモは国内の一般流通はできない。18年は12月にブラジル産が50kg入荷しているだけ。しかし、輸入量を対比すると、08年には618t(2、3、6月)、18年は17年の4万tを超えることはなかったが、それでも3割減程度で周年2万9000tとわずか2〜7月に月4〜7000tの輸入があった。



【今後の対応】
ジャガイモの輸入依存はこれからどうなるか。北海道の作柄が以前同様に回復すればだが、18年は東京市場で8月以降に120円前後の相場が続いた。加工仕向けには輸入品の60円/kg、17年の緊急調達時でも65円は魅力的だろう。18年の輸入数量は17年の翌年という意味で、様子眺めである。それでも3割減くらいなのだから、今後も年間2万t程度の輸入は継続するとみる。フライ向けの冷凍ジャガイモも、31万tから38万tに増えている。

この時期、茨城産を中心にした、越冬物の東京市場出荷が少なかったからだろうか。近年の気象災害増加傾向にあつて、ハクサイの東京市場への入荷の動向にほぼ変化は見られない。だから、18年の輸入急増は、不作や市場相場に連動した動きではない。どこかの加工食品メーカーが、中国や韓国から緊急手当てしたものだ。ハクサイは、重要野菜と認定されているため、いまだに凶作時には国による緊急対策で輸入措置の対象であるのだ。

【背景】
この時期、茨城産を中心にした、越冬物の東京市場出荷が少なかったからだろうか。近年の気象災害増加傾向にあつて、ハクサイの東京市場への入荷の動向にほぼ変化は見られない。だから、18年の輸入急増は、不作や市場相場に連動した動きではない。どこかの加工食品メーカーが、中国や韓国から緊急手当てしたものだ。ハクサイは、重要野菜と認定されているため、いまだに凶作時には国による緊急対策で輸入措置の対象であるのだ。



【今後の対応】
ハクサイ入荷の増加傾向は、生産拡大が背景にある。近年、漬物類が総じて低迷傾向にあつても、ひとり成長しているのがキムチだ。東海漬物などの大手の主力商品であり、原料は産地と契約取引で数量・品質・価格を安定化させている。一部、中国などで現地生産や委託生産、軽度の加工処理程度で輸入するケースもあるが、国産キムチはほぼ国産ハクサイで賄われている。一般家庭のハクサイ消費が減少傾向にあつても生産拡大されるゆえである。

ジャガイモ

北海道産が25%減。輸入品は2万t台での継続の恐れ

【概況】
東京市場のジャガイモ類の入荷推移は、08年対18年の数量では11%減、単価は3%高い。入荷減少の原因は北海道産がこの10年間を対比すると25%も減っていて、単価も08年94円に対して18年は23%高く116円。一方、長崎産は10年で3%程度増えて、単価は131円から3割近く安い94円である。北海道産のシェアを比べても64%対54%と10ポイント下げた。18年前半の北海道産が極端に少なかったことで、様々な影響が出た。

ハクサイ

輸入が前年の6倍。キムチ需要で生産拡大し流通も安定

【概況】
東京市場のハクサイの入荷は10年間を対比すると、18年に数量で16%増えている。どの月を比べても18年のほうが数量増なのである。増えている月でも1〜3月の単価は135〜165円。08年の輸入品の入荷は1725kgと無きに等しいが、18年には1%以下だが178tある。全体の輸入は、08年は3〜4月、11〜12月だけで92t。ところが、18年は17年対比で6.4倍の1万6000tを超えた。周年輸入のうち75%が1〜3月だ。

今年の市場相場を読む

輸出6000t輸入550t。単価高で消費者離れも

ナガイモ

【概況】

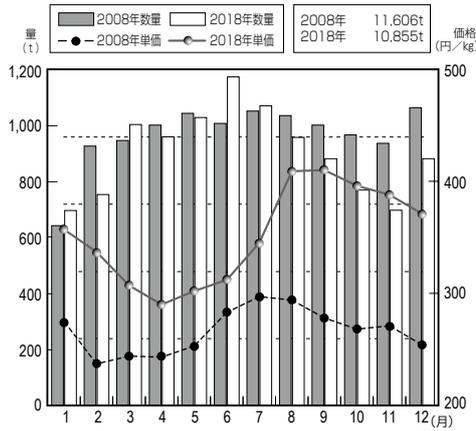
東京市場のナガイモは、過去10年では数量は7%減少で単価は3割高くなった。1月が600t程度と少ないが、年間を通じて毎月900~1000tが入荷する。その貯蔵性で常に売場に存在する。近年は輸出が増えて、18年では約6000tと伸びている。台湾向けの場合は360円/kgと、国内販売同等かそれ以上で売れるため、産地は国内流通量を絞り気味にして輸出に回し、国内価格を浮揚させようとしているようだ。

【背景】

輸出するほど国内生産を持っているはずだが、日本には輸入品も入ってきている。08年当時は80t程度だったが、18年では17年対比で3割減っているものの実数で550tある。東京市場にも08年で860kg、18年では150kgとわずかながらも入荷している。輸入の際の単価は、775tが入った17年で540円/kg、18年で800円/kg。これに対して市場に入荷した輸入物は200円/kg以下。輸入品はナガイモではなくヤマトイモやヤマノイモ系だ。

【今後の対応】

輸入は毎月コンスタント。しかも徐々に増勢だ。18年では中国とベトナムが半々だが、平均単価は中国産が6割方高い。月によって輸入単価が大きく変動しており、謎に満ちた輸入状況であるが、少なくとも一般需要ではなく、漢方薬などの特殊需要がありそう。輸入手当ての余剰品が市場に投げられるのだろう。日本の「ナガイモ」は他国にはないため、台湾や米国から引きが強いが、国内では高級品並みの高単価になって消費者離れを危惧する。



エダマメ

10年で2割減3割高。ピーク時も輸入冷凍品が増える

【概況】

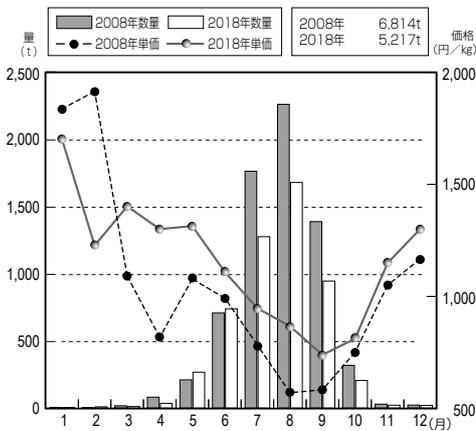
東京市場のエダマメは、08年対18年では数量は23%も減って31%高くなった。08年の場合3~4月から9月ごろまでと出荷期間が長かったが、8~9月には相場はダレた。18年は始まりが若干遅く、後半も出荷が続いても単価は強含みで推移した。出荷は後半にずれ、早生より食味のいい晩生への移行、すなわち食味重視傾向になっているということだ。生鮮の輸入は17年対比で3倍増ながら、08年対比では42%減っている。

【背景】

生鮮エダマメの生産は季節性が強い。ため、輸入物は国内のシーズン前の3~5月期中心である。食味追求というよりは業務用、品揃え用としての需要である。その意味からは、国産の出回りに先駆けて出てくる前座の役割以上のものではない。気になるのは18年の場合、国産の出回りが急減した8月に、わずかながら輸入実績があったこと。輸入の増減は大方は国産と競合するわけではないが、季節のピークに国産が減ると輸入増の可能性もある。

【今後の対応】

日本におけるエダマメ需要は年間を通じて存在する。それに対応するために冷凍物が輸入されている。冷凍品は08年対18年では37%も増えて7万6350tだ。台湾を中心に中国とタイが拡大している。しかも年間を通じて安定して輸入されていて、月別では5~9月の生鮮のシーズンにピークがある。輸入単価は18年で230円/kg前後。国産が減れば確実に冷凍品の輸入が増える。業務筋とのシーズン契約や、国産冷凍品などを考えていくべきだろう。



流通ジャーナリスト

小林 彰一

青果物など農産物流通専門のジャーナリスト。(株)農経企画情報センター代表取締役。「農経マーケティング・システムズ」を主宰、オピニオン情報紙「新感性」月刊「農林リサーチ」を発行。著書に「日本を襲う外国青果物」「レポート青果物の市場外流通」「野菜のおいしさランキング」などがあるほか、生産、流通関係紙誌での執筆多数。